

高濃度汚染土 流出

写真は東京新聞 11 月 18 日朝刊。リードから—10 月の台風 19 号の大雨により、東京電力福島第一原発事故で高濃度に汚染された山林の土砂が崩れた道路に流れ出ていたことが、本紙と木村真三・独協医科大准教授（放射線衛生学）の合同調査で分かった。放射性廃棄物の基準値内ではあるものの、放射性セシウムが大量の雨や土砂と共に河川の下流域に流れて汚染が拡散したとみられ、被ばく対策に警戒が必要だ。

台風 19 号は東北地方に大きな被害をもたらした。原発事故地帯は水害だけでなく、「高濃度汚染土流出」という深刻な問題も明らかになっている。注目すべき記事を抜粋して紹介したい。

調査は台風通過後の 10 月 24～29 日、福島県南相馬、いわき、二本松、本宮各市の土砂崩れや川の氾濫現場、浸水した住宅地の計 15 カ所で堆積した土砂を採取し、セシウムの濃度を測定した。

南相馬市小高区の山から路上に流れ出た土砂で、1 畧当たり約 3000～5000 ベクレルのセシウムを検出した。現場は川沿いで住宅地のの上流。近くに墓地があり、墓参りで住民が訪ねる場所だ。原発事故後、山林で除染したのは縁から 20 畧の範囲だけだったため山奥に高濃度の汚染が残っており、その土砂が流出したとみられる。

同じ場所では台風通過直後の同 14 日、住民の白髭幸雄さん(69)が土砂を採取し、1 万 1000 ベクレル超を検出していた。放射性廃棄物の基準(8000 ベクレル) を超える高濃度だった。白髭さんの採取後、本紙が採取するまでの間に大雨が降っており、汚染土の一部が川に流れ、セシウム濃度が下がったと推定される。

同市原町区の新田川の中・下流域では、氾濫して河川敷にたまった土砂から約 460～2000 ベクレルを検出。二本松市の畑や本宮市の住宅地にたまった土砂も高濃度ではないものの、汚染は明らかだった。

木村准教授は「山奥にたまったセシウムが、大量の雨と土砂で拡散されながら下流に流れたと考えられる。局地的に放射線量が高い『ホットスポット』の場所が台風で変わった恐れもあり、被災地に入るボランティアらは感染症対策のためだけでなく、内部被ばく対策でもマスクを必ず着けてほしい」としている。

今回の調査メンバーである木村准教授には、昨年 6 月下旬に宮本憲一先生らと福島原発事故地域を調査した時にお世話になった。木村先生から放射能汚染の怖さ、汚染地域の現状を学んだ。原発事故から 8 年 9 ヶ月が経過するが、事故は収束していない。

(2019 年 12 月 11 日)

